

高齢者見守り実証実験 一徘徊見守りシステムー

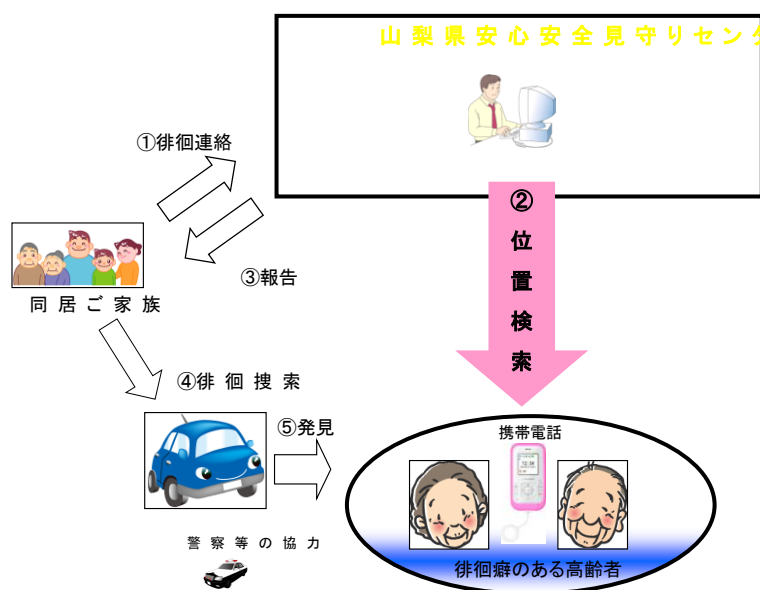
1 徘徊見守りシステム実証実験について

徘徊見守りシステムは、徘徊癖のある高齢者世帯を対象として、徘徊時搜索の効率化を行い、ご家族の皆様のご負担を少しでも軽減しようとするものです。

(1) 実証実験の目的

徘徊癖のある高齢者がいる世帯向けに携帯電話を貸与し、徘徊時の位置検索によって早期発見を目指すための携帯電話の導入費用・維持費用・可能性と制約を検討します

<イメージ図>



(2) 実証実験概要

(2) - 1 日常の携帯性と早期発見性評価

実際の高齢者の方に携帯電話をお渡しし、実際のボランティア員に見守り訪問の協力をお願いし、実験用フローに従い実験を実施します。実験終了後、ボランティア員によりチェックシートの検証結果記入欄に評価を記入します。

<(2)-1 日常の携帯性と早期発見性評価項目>

区分	項	検証項目	検証内容
日常携帯度	1	日常携帯度	普通の生活の中でいつも携帯を所持できるか？
	2	日常充電	普通の生活の中でいつも携帯を充電できるか？
	3		訪問することで充電を補うことができるか？
	4		同居家族により充電を補うことができるか？
早期発見性	5	早期発見性	徘徊時に、発見が容易であるか？

(2) - 2 搜索の効率性評価

ボランティア員の方に徘徊高齢者役を行なってもらい、もう一人のボランティア員が実際に見守りセンターからの情報をたよりに搜索し、合流する実験を実施します。実験終了後、ボランティア員によりチェックシートの検証結果記入欄に評価を記入します。

<(2)-2 搜索の効率性評価>

区分	項	検証項目	検証内容
搜索の効率性	1	口頭説明による位置把握	見守りセンターの位置の説明でおおよその場所は把握できるか？
	2	地図情報による位置把握	携帯電話に転送される地図により位置は把握できるか？
	3	搜索の効率化	徘徊時に、搜索が効率的になるか？

2. 実証実験スケジュール

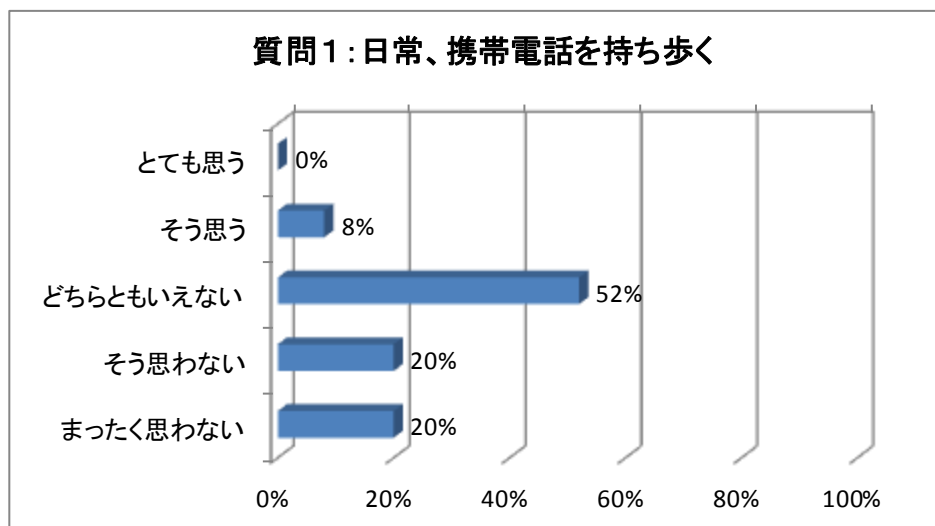
平成 24 年 10 月 1 日 (月) ~平成 24 年 10 月 30 日 (水)

3. 実証実験結果

あらかじめ作成したチェックシートについて、実際に見守りを担当していただいたボランティア員に「とても思う」「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」「まったく思わない」の5段階評価を行なっていただいた。

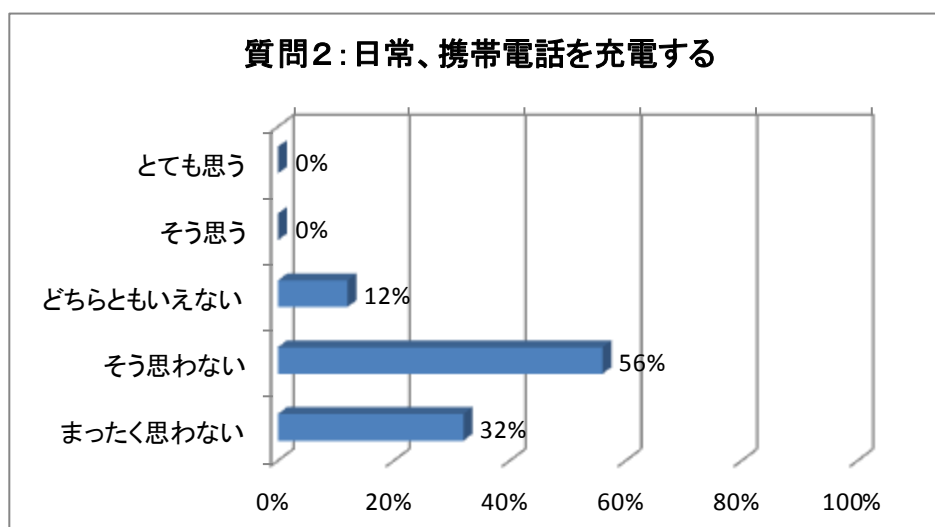
(1) 日常携帯性と早期発見性

質問1：日常、携帯電話を持ち歩く



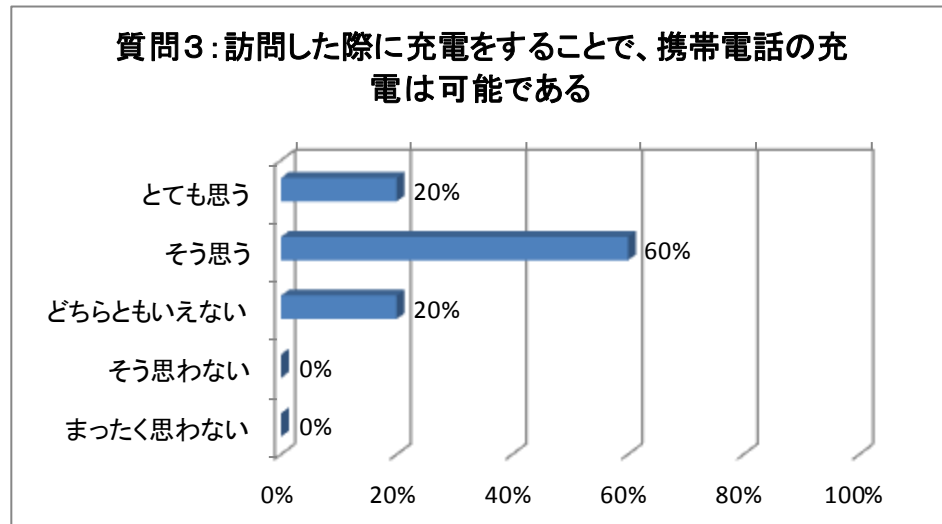
回答のうち、「どちらともいえない」が52%、「そう思わない、まったく思わない」が40%を占めており、徘徊高齢者が日常生活において携帯電話を所持することについては、どちらかというとな否定的な傾向となっています。

質問2：日常、携帯電話を充電する



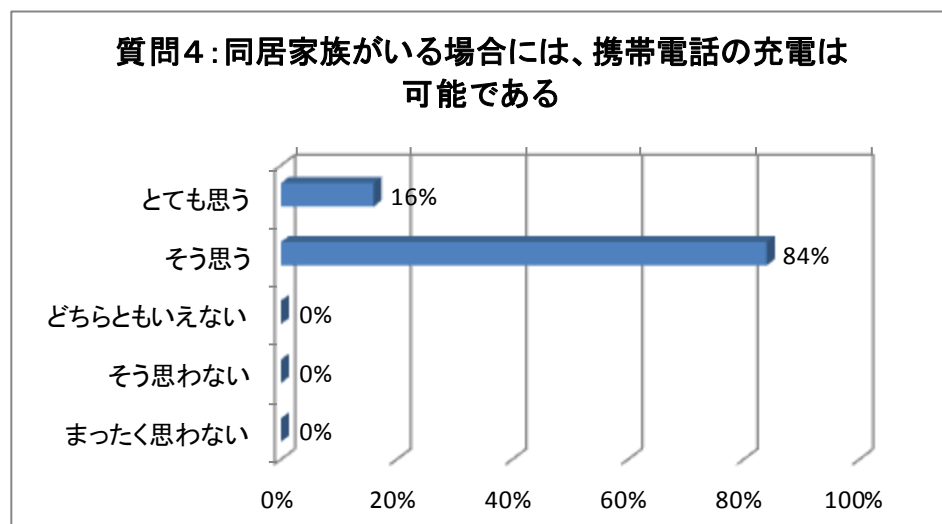
回答のうち、「そう思わない、まったく思わない」が88%を占めており、徘徊高齢者が自ら充電することはほぼ否定されています。

質問3：訪問した際に充電をすることで、携帯電話の充電は可能である



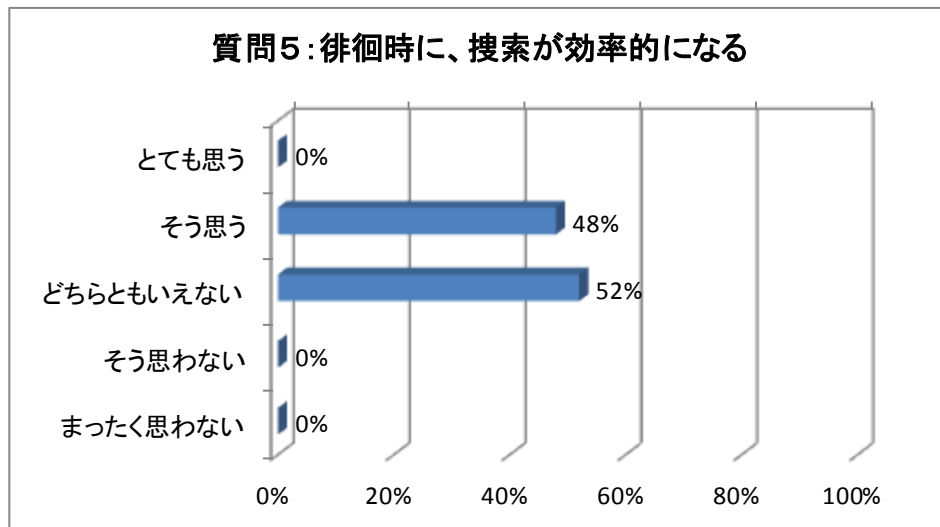
回答のうち、「とてもそう思う、そう思う」が80%を占めており、訪問介護員のサポートがあれば充電は問題ないと考えられています。

質問4：同居家族がいる場合には、携帯電話の充電は可能である



回答のうち、「とてもそう思う、そう思う」が100%を占めており、ご家族が同居されているならば問題ないと考えられています。

質問5：徘徊時に、検索が効率的になる



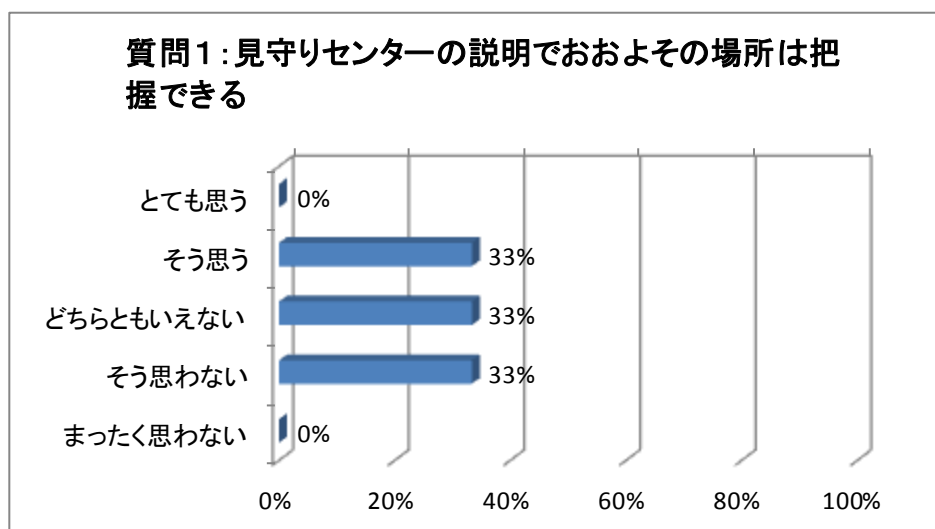
回答のうち、「そう思う」が48%、「どちらともいえない」が52%を占めております。見守り訪問をしている段階では、肯定的な意見と、やってみないとわからないといった意見にわかれたものと考えられます。

※実験に参加したボランティアさんの声

- ・朝から携帯を家に置いたまま昼間まで徘徊した。
- ・携帯を充電して持ち歩くのは難しく、また機能を理解できない。
- ・携帯は持たずに出かけようとする。「出かけるときにはこれをカバンに入れて出かけてくださいね」と声掛けしてから携帯を手渡している。
- ・毎日、ご本人が必ず持ち歩く袋に誰かが携帯を入れることで、持ち歩くことは可能だと思う。
- ・訪問の際、鞆の中にも充電器のところにも携帯がなく、本人に聞いても「わからない」とのこと、探すと枕元にあった。本人曰く「大切な物だから枕元に置いた」とのこと。常に持ち歩いてもらうためには訪問で様子を見に行くということが欠かせないと思う。
- ・本日の訪問では、携帯は充電器のところにあった。ご本人に確認したところ「普段出かける際は携帯を持って行く」とのこと。自分で充電しているかは分からないが、「持って行く」意識はありそう。
- ・枕元に携帯とバックがあったので持ち歩いている可能性がある。
- ・携帯はいつも持ち歩くバッグに入っていたが、入れたのは息子さんで何も言わなければ本人はバッグから出してしまう。
- ・携帯はいつもの場所に置いてあり充電されていた。家族やサポーターがバッグに入れるなどして配慮することが必要と思われた。
- ・充電器に置かれた携帯を確認したので、巾着袋に入れてもらおうと声をかけたが巾着袋が見つからず断念した。
- ・本人の部屋にある巾着袋に携帯は入っていた。
- ・ご本人で充電して、持ち歩き、充電するのは難しいと思う。
- ・声をかければカバンから携帯を出し充電できた。
- ・枕元に携帯があり、電池容量はあったが一応充電した。
- ・ヘルパーさんに充電をお願いすることも可能ではないかと思う。
- ・訪問を頻繁に行う（2日に一回ほど）のであれば電池は持続的に持つと思う。
- ・息子さんと一緒の時は充電できていた。本人は携帯が何のためにあるのか理解できていなかった。

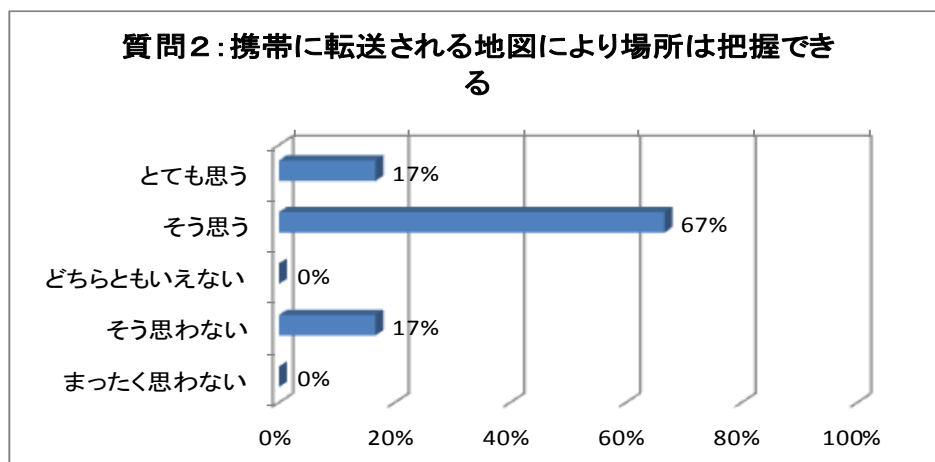
(2) 搜索の効率性

質問1：見守りセンターの説明でおおよその場所は把握できる



回答のうち、「そう思う、どちらともいえない、そう思わない」が33%ずつ分けあっています。これは、徘徊場所によって見守りセンターの担当者の土地勘に違いがあり、口頭での説明が容易な場合と難しい場合があり、このような傾向になったと考えています。

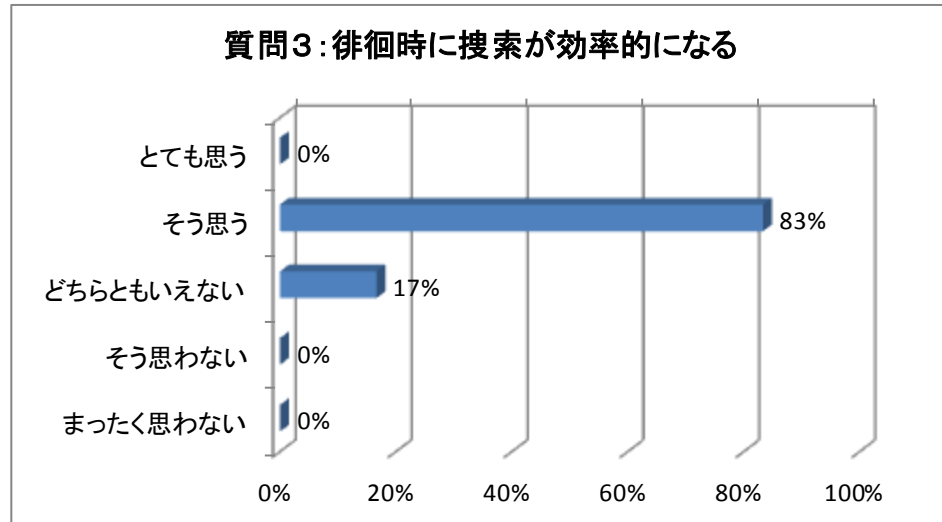
質問2：携帯に転送される地図により場所は把握できる



回答のうち、「とても思う、そう思う」で84%、「そう思わない」が17%と評価が分かれています。これは、地図情報を受け取る際に携帯電話で受けた場合は、地図が自由にスクロールできず、自分の立ち位置と地図のすり合わせが難しい傾向があり、スマートフォンで受けた場合は、地図のスクロールや拡大が自由にできるため場所も把握しやすくなる傾向にありましたので、このような傾向になったと考えてい

ます。

質問3：徘徊時に検索が効率的になる



回答のうち、見守り訪問の実験段階では「そう思う」は48%でしたが、実際の検索実験を通して83%に上昇したことは、検索が効率的であることを裏付けるデータであると考えています。

※実験に参加したボランティア員の声

- ・見守りセンターで方角を北側のところを西側と言われ探すのに時間がかかった。
- ・一人で探すと方角を間違えただけでも探せなくなるので実際の検索では複数のボランティア員による検索が必要と思う。
- ・徘徊者は常に歩いているので、見守りセンターから数分おきに地図を送ってもらえると歩いている方向がわかり検索の時間短縮になると思う。
- ・地図は30mずれていた。目印になる場所がわかりにくい場所だったので時間がかかった。
- ・携帯で見る地図は、自分の立ち位置との前後関係がわからないため、iphoneへ転送して拡大や移動して見るとわかり易かった。
- ・ボランティア員のメールアドレスが違っていたため、地図情報を送るまでに時間を要した。実際の運用ではあらかじめボランティア員に確認メールなどを送信してチェックする流れが必要になる。
- ・徘徊高齢者が移動しているので追跡が難しいと思った。
- ・地図は通常の携帯よりスマートホンのほうが見やすい。
- ・ボランティア員がスマホを持っているときは、住所と地図だけメールしてもらえばいいと思いました。
- ・徘徊高齢者本人を知らないボランティア員でも検索できる工夫として、本人の写真・身長・体重・特徴などをメールで一緒に送ってほしい。
- ・大きな建物の中に居るときはどの階にいるのかわからず、検索に時間がかかってしまった。
- ・メールで送ってくる地図はかなり正確でわかり易かった。

4. まとめ

この実証実験を通じて、

- ① 徘徊高齢者の検索時間は短縮され、本人の身の危険やご家族の負担は明らかに軽減すると考えられる。
- ② スマートホンで地図情報を受け取ることで検索時間をより短縮できるものと考えられる。

などのメリットがある反面、同居ご家族のフォローが必要で、徘徊高齢者には、常日頃、携帯電話を身に付けてもらう必要があります。また、徘徊高齢者の代わりに携帯電話の充電をする必要があります。

実験結果をうけて

携帯電話を利用した徘徊見守りシステムは、解決すべき課題がありますが、これからの高齢化社会にはなくてはならないシステムであると考えています。